

## 第1回相川正道賞祝辞

相川弘子

本日は、日本熱帯医学会・相川正道賞第一回授賞式に御招きいただき、大会長の五十嵐郁男先生に深く感謝申し上げますと共に、このような機会を頂き大変光栄に存じます。この度、前理事長の狩野繁之先生、現理事長の門司和彦先生のご尽力、又、当医学会理事会、評議員会、総会のご賛同を得て、新たに相川正道賞が創設されたこと、家族にとりましてこれ以上の喜びはありません。主人が天国で“よう、八年も忘れんと、憶えていてくれましたなー”と言っている顔が目に見えるようです。どんなにか喜び、誇りに思っていることでしょう。主人に代わりまして、厚く御礼を申し上げます。

相川が米国に渡り、Washington, D.C.のGeorgetown Universityで勉学を終えた段階で、それ以後の具体的な研究課題を頭に描いていたとは思いません。たまたまWalter Reed Army Instituteでマラリアを研究する機会があり、その中に自分の才能を発揮できる適所を見出したようです。人生における人との出会いのように、一生の課題もめぐり合わせのようにして現れ、主人はそのチャンスを幸運にも逃さず、捉えることが出来たのでしよう。

一見大雑把な印象に反して、主人は繊細な感受性を持っておりました。科学的分析力に加えて、細かい美しいものに対する認識が電子顕微鏡を使つての研究を一生続ける柱になっていたと思います。人間が作り出すどの芸術作品より、自然がこの世で一番美しいものである様に、マラリア原虫の細胞の形と動きを映像として捉えることに喜びと美を見つけ続けたに違いありません。

アメリカの明るい積極性と開放性を愛したと同時に、主人は心底で日本男児、薩摩隼人でした。アメリカの風俗、慣習に順応しつつも、常に日本人の和の精神、秩序正しさを重んずる精神が相川の日常生活、研究生活の背骨として貫いていたと思います。その点、アメリカでの研究生活のごく初期を除き、主人が日本との交流を続けたことがアメリカでの研究生活を支えるエネルギーになっていたと思います。日本から研究生を年々受け入れることで、自分の研究を拡大できたと同時に、そうすることで日本のために貢献していると考えたと思います。さらに日本に貢献したい気持ちが、引退すると同時に帰国し、日本で仕事を続けた動機と思います。

30年アメリカで研究生活をおくったことで、相川はグローバル視野で医学研究をすることの大事さを身をもって知り、その点で、日本のマラリア研究者のために自分の経験を役立てたいと希望しました。世界を舞台に活躍する機会を日本の研究者と一緒に育てることを目標に努力したと思います。

今回の受賞者の中澤秀介先生は、ケースウェスタンリザーブ大学時代に、主人のもとに留学をされた研究者の一人ですが、今では日本の国境を越え、グローバルに研究範囲、研究仲間を広げ、立派な成果を挙げておられると伺っております。その点でも中澤先生はこの賞の第一回受賞者として最適な方であると確信し、心から祝福を申し上げたく存じます。この賞がこれからも日本でのマラリア研究への貢献に報い続けることが出来ますよう祈っております。

最後に、創立53年を迎えた日本熱帯医学会の今後の益々のご発展と、学会員の皆さまのご健康をお祈り申し上げて拙い祝辞の結びと致します。

(2012.9.5.)